

英・女性旅行家の足跡たどる

「山形の素晴らしさを再発見」

英国の女性旅行家、イザベラ・バードが1878(明治11)年に県内を探訪した足跡をたどり、現在と当時を地図などで比較した論文「バード・ウォッチング」を、山形市東原町4、元小学教諭で教材販売会社社長、渋谷光夫さん(62)がまとめた。渋谷さんは「バードを通じて歴史あるものや、美しい自然が残る山形の素晴らしさを再発見できた。多くの人にバードの足跡を知ってもらいたい」と話している。

元小学教諭の渋谷さんが論文

28日に上山市で開か

れるシンポジウム「イザベラ・バードが愛した山形路」で発表する。バードは小国町から金山町まで14市町、約200キロを訪ねた。その足跡を明治から大正にかけての地図や、高橋由一が1883(明治16)年に初代県令(県知事)三島通庸の依頼で残した石版画などで現在と比較。バードが旅したところと現在の町並みの違いが一目で分かるようにした。バードが渡ったという上山市の堅盤橋や、紀行記に「アジアのアルカディア(桃源郷)」と書いたとされる米沢盆地などゆかりの場所も紹介。眼鏡橋(上山市)、一里塚(新庄市)など周辺の文化財も紹介した。



「バード・ウォッチング」を手に持つ渋谷さん

イザベラ・バード(1831~1904) 英国人の女性旅行家。20代から70代まで、南米と南極を除く全大陸を旅行。日本をはじめ中国や中東、米国などを訪れ、10冊以上の旅行記を執筆した。1878(明治11)年に北海道や東北を旅して「日本奥地紀行」を著した。

【林奈緒美】